

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和2年4月10日現在

機関番号：  
研究種目：奨励研究  
研究期間：2019  
課題番号：19H00018  
研究課題名：三燕における金工品の研究—日本列島・朝鮮半島における古墳出土金工品の源流—  
研究代表者 土屋 隆史 (Takafumi Tsuchiya)  
宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室 研究員  
交付決定額（研究期間全体）（直接経費）：330,000円

## 研究成果の概要

本研究では、中国東北部の三燕（前燕〔337-370年〕、後燕〔384-407〕、北燕〔407-436〕）における胡籙（騎馬遊牧民の矢を入れる道具の一種）の金具に注目した。中国での資料調査を通して製作技術やモチーフにかんするデータを取得し、三燕における胡籙金具の地域的特徴や変化の方向性を見極めた。また、三燕の胡籙金具の影響を受けたと考えられる朝鮮半島南部の初期の事例には、三燕の胡籙金具の最も新しい時期の特徴がみられることを確認した。三燕と朝鮮半島南部との交流を示した文献資料はあまりみられないが、当時の東北アジア内での対外交流の在り方を示すものとして注目すべき成果であると考えられる。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

魏晋南北朝時代、日本列島の倭の五王をはじめ、朝鮮半島南部の百濟、大加耶などは江南の六朝への朝貢を重ね、六朝に由来する遺物が日本列島、朝鮮半島南部へ多くもたらされた。その一方で、中国東北部に建国された国々と朝鮮半島南部・日本列島の交流は文献資料からはあまり読み取れず、考古遺物からみても中国東北部に由来すると認識できるものは少ない。その数少ない遺物が胡籙金具であり、文献資料に現れない当時の対外交流の実態が反映されていることを確認した。三燕との比較研究は、六朝と比べるとまだそれほど研究が蓄積されていないが、東北アジアという枠組みで古墳時代を捉えるための一つの論点になり得ると考える。

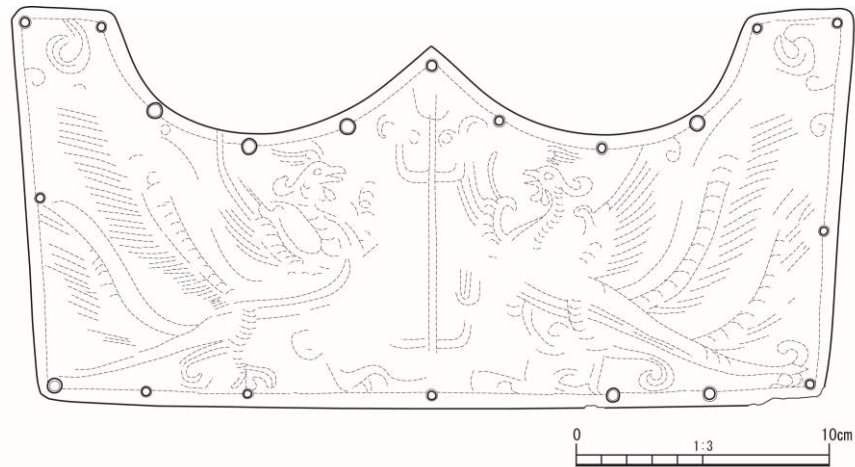
**研究分野：**考古学、魏晋南北朝時代（中国東北部）、三国時代（朝鮮半島）、古墳時代（日本列島）

**キーワード：**三燕、胡籙金具、金工品、編年、伝播

## 1. 研究の目的

申請書が研究対象としてきた三国時代、古墳時代の金工品（武具、装身具、馬具を始めとした金属工芸品）は、中国東北部に位置する三燕（前燕〔337-370年〕、後燕〔384-407〕、北燕〔407-436〕）の強い影響を受けて成立したと考えられている。三国時代、古墳時代の文化の源流を考えるうえで三燕は重要な地域であるが、現状ではそれほど研究が活発ではないため本研究を選定した。

本研究における主な研究対象は、騎馬遊牧民の矢を入れる道具の一種である胡籙（ころく）に装着された金具である。三燕の胡籙金具は、資料集成がおこなわれるとともに個々の資料に対する言及はあるが、公開されている情報が少ないため、比較研究は活発におこなわれていない。他の金工品の研究成果を踏まえながら胡籙金具の比較研究をおこなうことで、解明できる



第1図 北票喇嘛洞 I M 5号墳出土胡籐金具（W字形金具）（s= ほぼ 1/3）

ことは多々あると考えられる。本研究では、三燕における胡籐金具の地域的特徴の抽出、編年の作成、そして朝鮮半島への胡籐金具の伝播過程の解明を目的とした。

## 2. 研究成果

### （1）資料調査によるデータ収集

中国での資料調査を通して、胡籐金具を始めとした金工品の詳細な情報を収集した。とくに喇嘛洞 I M 5号墳出土品の調査に際して、高画質の写真を撮影することにより、表面に2頭の鳳凰が向かい合う文様が彫金で表現されていることを発見した（第1図）。

### （2）三燕における胡籐金具の系列と時間的変化

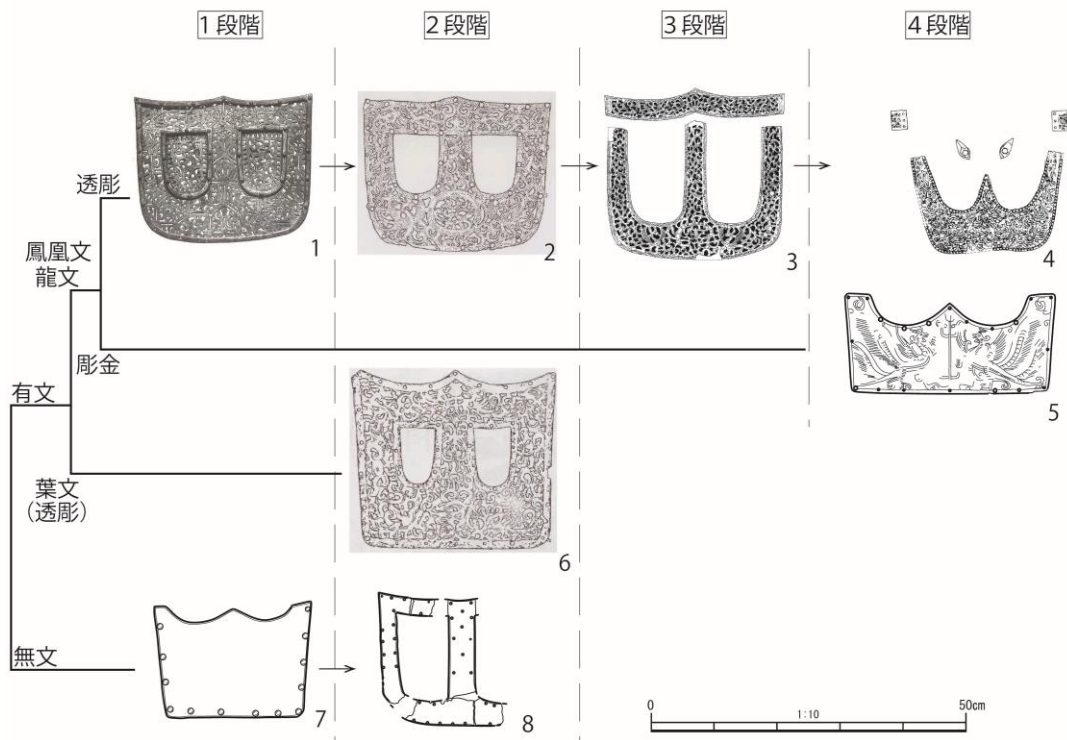
資料調査を通して得られたデータを分析した。三燕の胡籐金具で確認できたのは、背板に装着される短冊形吊手金具、収納部に装着されるW字形金具、帯に装着される鉸具と逆心葉形鍔板である。

W字形金具はその文様から複数の系列に分類できる（第2図）。まず、文様がないもの（無文）と文様があるもの（有文）があり、後者は鳳凰文・龍文と葉文に分かれる。また鳳凰文・龍文は透かし彫りで表現されたもの（透彫）と彫金で表現されたもの（彫金）に分類できる。葉文は、現状では透かし彫りで表現されたもの（葉文（透彫））のみである。韓国慶山林堂7B号墳主槨例（第2図4）は中国で出土したものではないが、精緻な龍文が透かし彫りされた胡籐金具は朝鮮半島南部で他にみられず、喇嘛洞村古墓例（第2図3）と類似していることから、三燕の影響を受けたものである可能性があるため、この検討に含めた。

また、W字形金具を形態的特徴から分類すると、上端の括れが小さく、中央に透かしがないもの（1類）（第2図1・7）、上端の括れが小さく、中央に透かしが2つあるもの（2類）（第2図2・6・8）、上部の金具が分離し、下部の括れが大きいもの（3類）（第2図3）、分離した上部の金具がなくなり、下端が幅狭く、上端が幅広くなるもの（4類）（第2図4・5）に整理できる。共伴遺物がないものが多いことから製作時期の検証が難しいが、W字形金具は1類→4類へと型式変化したと考えられ、胡籐金具の製作時期の指標にできる可能性がある。さらに、W字形金具の型式変化を指標とし、共伴する吊手金具と帯金具との併行関係を確認したうえで、1～4段階の4つに段階を設定した（第2図）。

### （3）朝鮮半島南部地域への胡籐金具の伝播

三燕で最も古い胡籐金具は4世紀中葉頃に製作されたものであり、朝鮮半島南部で胡籐金具



1. 伝中国 2. 陝西省歴史博物館新征集文物 3. 北票 喇嘛洞村古墓 4. 慶山 林堂 7B号墳主槨 5. 北票 喇嘛洞 1M5号墳  
6. 西安 梁猛墓 7. 朝陽 十二台郷碑廠 88M1号墓 8. 朝陽 三合成墓

第2図 W字形金具の文様系列と変遷 (s=1/12、5はほぼ1/12)

が出現する4世紀末～5世紀初頭頃とは出現時期に違いがある。林堂7B号墳主槨例(第2図4)に代表されるように、朝鮮半島南部でみられるW字形金具は三燕の胡籐金具の4段階に位置づけられるものであり、W字形金具が三燕から朝鮮半島南部へ伝播した時期は4段階であったと考えられる。

また、三燕の吊手金具は、基本的に短冊形である。軸受、鉸具ともに共通した特徴をもつ事例が、朝鮮半島南部の烏山水清洞4地点25号木棺例に確認できる。製作地の判断は難しいが、これは三燕の胡籐金具の影響を受けたものである可能性が考えられる。

このように、朝鮮半島南部の胡籐金具の中には、三燕の影響を受けたと考えられる事例が確認できる。その一方で、朝鮮半島南部における初期の胡籐金具に多くみられる双方中円形1類吊手金具は、三燕には確認できない。双方中円形1類吊手金具の祖形と考えられる事例が高句麗の集安麻線溝1号墳(吉林省博物館集安考古隊1964)で確認されていることから、双方中円形1類吊手金具は高句麗から伝播したものであった可能性が考えられる(土屋2018)。高句麗における胡籐金具の情報が少ないため曖昧な部分は残るが、朝鮮半島南部の胡籐金具は、三燕地域と高句麗地域の両地域から影響を受けて出現したと考えられるだろう。

#### (4) 今後の展望

本研究では三燕における胡籐金具の地域的特徴と系列についてはある程度把握することができた。だが時間的変化については、型式変化を根拠に4段階に区分したものの、共伴遺物の編年的位置づけに基づいた型式変化の検証が済んでいないため、各段階に実年代を割り振った編年は作成できていない。中国の胡籐金具は依然として数が少なく、その中には共伴遺物のない征集品(購入品)が含まれているため検証は難しいが、発掘調査によって出土した事例を中心に共伴遺物を詳しく検討することで、胡籐金具の分析の確度を高める必要がある。それにより、

朝鮮半島南部へ胡籐金具が伝播した時期や経緯などの歴史的背景をより詳しく検討することが可能となるだろう。

## 引用文献

(日本語)

土屋隆史 2018 『古墳時代の日朝交流と金工品』 雄山閣

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1989 『藤ノ木古墳：古代の文化交流を探る：特別展』  
(中国語)

白榮金・万欣・雲燕・俊涛 2008 「遼寧北票喇嘛洞十六国墓葬出土鉄甲復元研究」『文物』2008  
年3期、pp. 70-87, 96

強跣 2016 『披沙揀金廿五載 陝西省歴史博物館新征集文物圖録』 陝西人民出版社

吉林省博物館集安考古隊 1964 「吉林輯安麻線溝一号壁画墓」『考古』1964年10期 中国社会  
科学院考古研究所、pp. 520-528

遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館 1997 「朝陽十二台郷磚廠 88M 1 発掘簡報」『文物』1997  
年第11期 文物出版社、pp. 19-32

田立坤・李智 1994 「朝陽発現的三燕文化遺物及相關問題」『文物』1994年第1期 文物出版社、  
pp. 20-32

西安市文物保護考古研究院 2018 「陝西西安洪慶原十六国梁猛墓發掘簡報」『考古与文物』2018  
年4期、pp. 42-52

于俊玉 1997 「朝陽三合成墓出土的前燕文物」『文物』1997年第11期 文物出版社、pp. 42-48  
(韓国語)

鄭永和・金龍星ほか 2005 『慶山林堂地域古墳群Ⅷ—林堂7号墳—』(學術調査報告第48冊) 嶺  
南大学校博物館

## 図面出典

第1図：筆者作成(撮影写真をトレース。縮尺は白榮金・万欣・雲燕・俊涛 2008 をもとに推定)。

第2図1：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1989 より引用。2：強跣 2016 より引用。3：  
田立坤・李智 1994 より引用。4：鄭永和・金龍星ほか 2005 より引用。5：筆者作成(撮影写  
真をトレース。縮尺は白榮金・万欣・雲燕・俊涛 2008 をもとに推定)。6：西安市文物保護考  
古研究院 2018 より引用。7：遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館 1997 の図を筆者が再ト  
レース。8：于俊玉 1997 の図を筆者が再トレース。

## 3. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。